建築と真摯に向き合う

— 大林組設計部のDNA —
『誠実』なものづくり

大林組設計部のDNAである「『共創』による『誠実』なものづくり」の『誠実』とは何なのか。誠実とは「まじめで真心がこもっていること」だが、特に設計においては「言行一致」を指す。つまり、当初の言葉と矛盾なく設計を実現することである。大林組設計部では、初期のコンセプトや意図にぴたりと合うソリューション（解決法）を常に追求し、デザインとそれを実現する技術を整合させた、妥協のない設計を目指している。

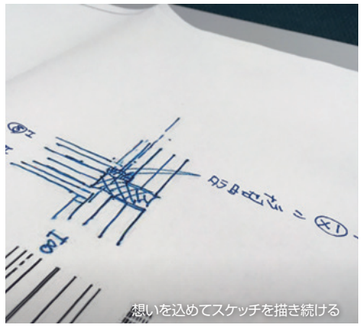
手掛けるプロジェクトの全てが、奇を衒ったアイデアや高級な素材で構成されるわけではない。ただ、建築と真摯に向き合い、各部位一つ一つを丁寧に謙虚に細部まで突き詰め、竣工まで設計者の想いを込め続けるのだ。

オフィスビル・オーク目黒では、基本計画から工事監理に至るまで、建築との格闘が48か月にも及んだ。意思のあるデザインの集積によってつくられた『誠実』なものづくりの記録を今、振り返る。

オーク目黒
Oak meguro

用　　途	事務所・駐車場・飲食店
敷地面積	3,820.81㎡
建築面積	2,402.57㎡
延べ面積	23,100.04㎡
構　　造	鉄骨造・一部鉄骨鉄筋コンクリート造
規　　模	地下2階・地上10階・塔屋2階
工　　期	2014年7月～2016年3月(21か月)

設計から施工まで想いを込め続ける


想いを込めてスケッチを描き続ける

スケッチは図面へと昇華し、設計図書としてまとめる

オフィスエレベーターホール

配筋間隔の寸法を実測確認

精度管理を徹底することで安心・安全を保つ

北側外観

豊かな好奇心をもって、白紙に向かう

設計者はプロジェクトに対して、並々ならぬエネルギーを注ぎ込むものだ。だからこそ、取り組む建築がさらに良くなり、ベストに近づくまで思案し続ける。求められる諸条件に同じものはなく、たとえ敷地が同じだとしても、同一の建築はできあがらない。時代の変化があり、情熱やひたむきさなど、設計者の想いが加わるからだ。設計には人、材料、敷地など常に新しい出会いがあり、時には困難との闘いがある。条件を分析し、湧き出たイメージを何も描かれていない方眼紙にファーストスケッチとして描き、想いと共に検討を繰り返し、図面へと昇華させる。

言葉と矛盾のない「言行一致」

2012年5月、オーク目黒の敷地をはじめて訪れた時の印象は忘れることはない。敷地の南北が目黒通りに面し、そこには解体予定のオフィスビルが建っていた。周辺には旧朝香宮邸である庭園美術館、自然教育園の豊かな緑が広がり、JR目黒駅前にも関わらず静かで落ち着いた場所だった。その静けさの中で新しい建築をつくるという、強い想いを抱いた。

想いを込めたデザインを実現するためには、図面と技術とを妥協なく整合させていく必要がある。すなわち「言行一致」だ。1つとして同じ条件はないため、既存の技術では成し得ない場合もある。オーク目黒では既存ビルの解体工事中から工事事務所と共にベストなソリューションを徹底的に追求することで、新しい技術が生まれた。設計者が関係者の知恵を引き出し、集積し、設計図書としてまとめあげる。その過程で、ものづくりに対する熱意が関係者に伝わり、共有されていく。全ての関係者が竣工まで想いを込め続けることで、当初の想いと矛盾のない設計を実現したのである。

安心・安全は、自分の目で見て確認してこそ保たれる

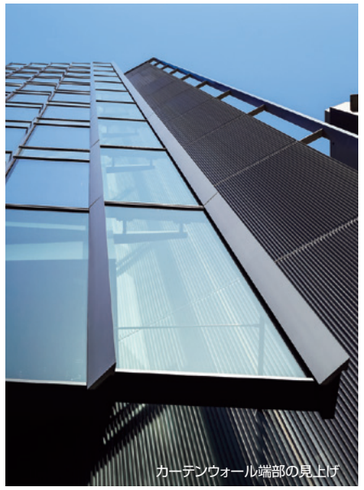
建物の安全性は関係法令や設計図書に記された性能を確実に遵守することで保たれる。工事の開始と共に設計の一環である工事監理業務がはじまる。監理業務では、工事が設計図書通りに施工され、要求品質を保っているかどうか実際に目で見て確認することが重要だ。また設計者としては設計図書に込めた想いを直接現場に伝えることで、意図したデザインを忠実に実現させる重要な期間となる。着工後、設計図書を元に施工図や製作図が描かれるが、その図面にデザイン意図や想いが反映されているかを丁寧に、根気強く確認する。具体的には寸法はミリ単位まで徹底的にこだわり、デザインを反映した図面にまとめあげる。図面がまとまれば施工となるが、工事の進捗を常に自分の目で見て確認することで安心・安全を保証し、デザインを正確にかたちにするのだ。

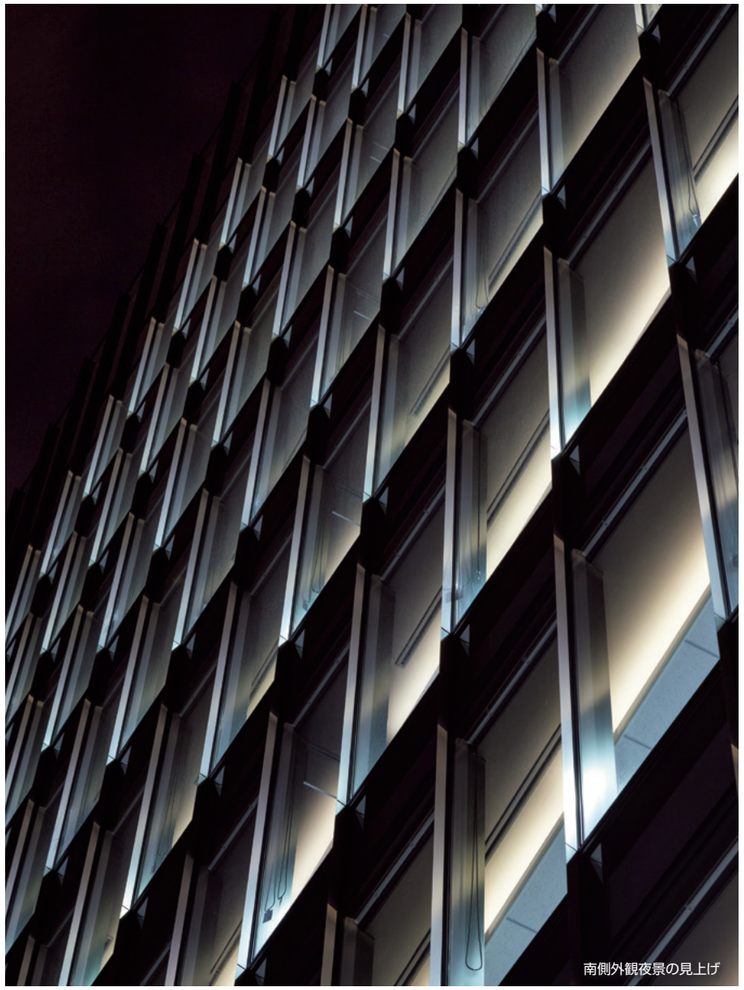
隠れた鉄筋1本1本に至るまで丁寧に見て回る

鉄筋は人間でいう毛細血管ともいえる。毛細血管は細いながらも人の体の中で動脈と静脈をつなぐ、なくてはならないものとなっているが、その存在は外から窺い知ることはできない。同様に、鉄筋は一度コンクリートを打ってしまえば二度と見ることはできない。オーク目黒では、解体した既存オフィスの杭を避けた位置に、新設杭を施工した。正確な位置に新設杭を施工するため、工事事務所と連携し、実測や重機の振動による誤差などを詳細に検討することで、精度の高い施工を行った。計画特有のポイントとなった杭の施工内容を事前に関係者に周知し、意識を共有することで、設計図書の意図を正確に伝える。最後は鉄筋の1本1本に至るまで、現場を見て回ることで、求めた性能を確実に実現した。

原寸大で考える

カーテンウォールを試作しさらに細部を検討する


カーテンウォール端部の見上げ


南側外観夜景の見上げ

デザインの源は
原寸大で考えること

建築をデザインする上で重要なことの1つとして、常に原寸大で考えるということがある。言い換えれば、設計図は100分の1といったスケールで描かれているが、それぞれの部分は原寸大で考えられ、設計者の1分の1の想いが込められている。具体的には、外装材や内装材、または植栽1本においても色や素材感、光の反射具合、雰囲気といったものを原寸のサンプルで見て、意図したデザインが再現されるか徹底的に検証していく。原寸サンプルを見ることにより、さらなるデザインのブラッシュアップを図ることも少なくない。原寸大で考え、試行錯誤しながら吟味されたデザインは唯一無二の建築となる。

唯一無二の外装

目黒通りに面する基準階の事務室は、南側に足元から天井まで大きく開いた眺望を求めた。一方で、大きく開いた分、強い日射を受けることになった。この相反する問題を解決するために、ガラス面を約3.5度ずつ角度を付け、サッシのフィンを日射遮蔽側に大きく傾けることで、眺望を確保しつつ、日射を抑制したのだ。これにより建物が受ける環境負荷を低減することができた。諸条件を丁寧にデザインに落とし込み、サッシ形状にオリジナリティをもたせることで、時刻や見る位置によって全く異なる表情を生み出す。アイデアを地道に検討し、その効果を検証し続けることで実現し、新しいデザインが生まれることの一例である。建物を見上げるとその個性は顕著に現れ、夜には事務室内からこぼれる明かりが都市に浮遊する表情を創出している。絶え間ない検討の末、新しいランドマークとなる個性的な外装を実現した。

素材と向き合う

素材を手にとり、ストーリーを練る

搬入前の石の仕上げの程度や寸法を最後まで確認

検討した部分を現場に設置し、全体に立ち返り考える

オフィスエントランスロビー

素材選びと組み合わせから
生み出した新しいストーリー

設計者は、素朴な素材であっても、仕上げの吟味や組み合わせから新しいストーリーを備えた建築空間を生み出す。オーク目黒においても石とメタル、テラコッタとガラスといった素材の組み合わせを、建築空間の部分ごとに検討しては、建物全体に立ち返った。逆に、建物全体を検討しては部分に立ち返る。こうした部分と全体のイメージの往復を繰り返すことでデザインの一貫性が保たれるからだ。一つ一つの素材と向き合い、どんな表現ができるのかを追求し、幾通りもの組み合わせを考えた。その素材のもつ表現力を最大限まで活かしたデザインをすることで、空間全体が豊かで、表情を与えることができたのだ。

硬いものでつくる
柔らかなもてなし空間

エントランスロビーは硬い素材で構成されることが多い。オーク目黒では、硬い材料を使いながらも、人を迎え入れるにふさわしい柔らかな表情をもたせることを意図した。そのため、素材のもつポテンシャルや異なる素材が隣り合った際に起こるドラマを読み取る作業からはじめた。たとえば、石の代表的な仕上げ方には叩く、磨くなどがあるが、その程度によって表情が大きく異なってくる。また、素材の組み合わせによっても、それらが生み出す空気感が変わる。極端なようだが1つの素材が変わるだけで、空間全体の雰囲気はがらりと変わるのだ。空間全体への影響に留意しながら、一つ一つの表現を調整し、素材の奏でるハーモニーをつくりあげた。石の粗い表情となめらかに磨かれた表情の組み合わせ。そして硬い石と柔らかい表情をもつテラコッタの組み合わせにより、人を迎えるにふさわしい柔らかなエントランス空間を実現した。

ピロティを設け、都市・歩行者に開くエントランス

最後に全てが報われる

意思のあるデザインを集積した建築

建築とは意思のあるデザインが集積した結果ともいえる。ひとときも気を緩めず、本気で真剣に仕事に取り組んだ結果が建築として残るのだ。細部までこだわったデザインは、積み上げられた技術の高さを示すと共に、設計者の建築に対する誠実にして謙虚な姿勢を示している。意思がかたちとなり、建築となってできあがる。設計者なら誰しもができあがった建築を前にして、当初考えたコンセプトが実現されたかを確認するために再び建築と向き合い、自問することとなる。好奇心をもち続け、真摯に建築と向き合うことで満足のいくものができる。つまり、建物が完成するまでこだわり続けたことが完成度の高い建築となり、全ての努力が最後に報われるのである。

当たり前のことを誰よりも当たり前にすること

大林組設計部の仕事は、当たり前のことを当たり前に徹底することがベースだ。普遍的な素材・手段を用いながらも固定観念に縛られず、プロポーション・寸法を徹底的に吟味することで生まれる強い空間づくりを目指している。すなわち建築・空間に合わせて一つ一つ丁寧に“どうあるべきか”を自問自答し、素材の仕上げや納まり、寸法を再度見つめ直し、試行錯誤することで1つの答えに修練していく。部分が全体に与える影響を考え、逆に全体から求められる部分を考え、ミクロとマクロを往き来することで、新たな固有性を宿し、密度の濃い建築が実現するのだ。

時刻や見る位置によって異なる表情を見せる外観